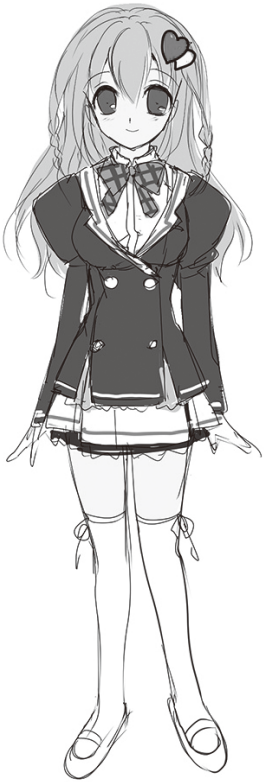
立ち読み版
幼なじみが天然すぎて性奴隷になるといいだした件
小説 愛枝直
挿絵 わつきるみ

第一章　幼なじみのおっぱいがゆめいっぱいに柔らかかった件　006
第二章　土下座で謝ったら逆におしゃぶりされた件　047
第三章　幼なじみが可愛すぎて思わず逃げ出した件　088
第四章　異常性欲者を通り越し両刀認定された件　127
第五章　天然すぎる幼なじみが俺の恋人になった件　144

登場人物紹介

Characters

ふえ？
また騙したの～～っ!?



紗良（さら）＝フローレンス＝香坂（こうさか）

人の言うことを簡単に信じてしまうハーフの女の子。よく迷子になったり何もないところで転んだりするなど、極度のドジッ子でもある。

久瀬（くぜ） 大和（やまと）

紗良の幼なじみの少年。よく嘘をついて紗良のことをからかっている。

導入なんて大抵はインタビューシーンでいつもなら容赦なく早送りなとこだ。ドアタマからの刺激的な光景に引き込まれた少年は食い入るように画面を見つめる。

しばらくするとフレームの向こうからごっついやくざ風の男が現れて、ドスのきいた声で緊縛少女をなじりはじめた。怯えた風ながら女優さんは微かに息を荒らげて落ち着かなげにもじもじとする。いくらなんでも演技だとわかっちゃいるが、そのマゾっぽい仕草というか虐めてオーラ満々な感じはなんというか、とても、こう、超そそった。なんだか妙な趣味に目覚めそうだ。

やがて画面の中の男が顎をしゃくるようにして跪(ひざまず)くように促す。女優さんは肩口で縋るようにしながらゆっくりと膝をついた。

「よぉーし、いいぞぉ、いいぞぉ」

少年は鼻の下を伸ばしておっさん臭く呟きながら、ベルトのバックルを外してスラックスをずり下ろす。黒髪の少女が前の張り詰めたボクサーパンツを口で引きずり下ろすのに合わせ、自分の下着をはぎ取った。モザイクの向こうで余裕たっぷりに下を向いた男優のペニスに対し、露出した持ち物はみっともないほどガチガチに勃起している。

真下から顔を寄せるようにして女優さんがアレを口に含む。大和も目を血走らせてテレビを見つめながら座布団の上であぐらを掻いた股間に右手を伸ばす。しかしその時――。

「大和ちゃん――」

ガチャリ――と。聞き慣れた声が少年の名を呼ぶと同時にドアが開け放たれた。

「おわぁあああああっ！」

大和は飛び上がって壁際のベッドに飛び込んだ。布団をたぐり寄せて股間を隠しズボンを上げる。下着がぐしゃぐしゃになってタマのところで引っかかりズボン生地に直で竿が当たるがこの際贅沢は言っていられない。

「紗良、いつも部屋に入る時はノックしろって――！」

「ご、ご、ごごめんなさぁ～いっ！」

裏返った声で怒鳴ると、紗良はおろおろしながら謝った。だが、すぐにつけっぱなしの映像に気付いてきょとんと目を丸くする。

「――～～～ッ！　や、や、大和ちゃんこそなに見てるのよぉ～～っ！」

そしてそれがいわゆるAVだと気付くと顔を真っ赤にして怒鳴り返してきた。

「いやそのこれはだな！」

今度はあべこべに大和が慌てる番だった。画面の中ではヤクザ男が女優の頭に手を乗せてゆったりと前後に揺らしていた。唇の中にモザイクが収まっては引き出され、ぐちゅぐちゅと何とも気まずい音が鳴る。

とりあえずそれを止めようと、ベッドから脱出を試みる。だが大和は動揺のあまりけつまずいて、ビタンと床に転げ落ちた。幼なじみは驚き駆け寄ろうとするが、少年の視線でその先にあるリモコンとパッケージに目敏く気付き、ふいに足を止めた。

幼なじみは芋虫のようにもぞつく大和を放ってDVDケースに歩み寄る。

「……いいなりあいど、こーほせー？」
そして、細い指でそれを取ると、でかでかと書かれたタイトルを読み上げた。
（終わった……何もかもが終わった）
言い訳しようのない証拠物件を押さえられ、大和は目の前が真っ暗になった。
いくら紗良でも年頃の女の子だ。おっぱい揉みたさに嘘をついた記憶も生々しいうちに緊縛調教エロＤＶＤを見てたともなれば、さすがにどん引きするだろう。かくして久瀬大和くんの初恋は虚しく散ったのでしたとさ。完。
完全に凍り付いた少年をよそに、紗良はテレビに目を戻して食い入るように眺めていた。画面の中では仁王立ちした男の腰元で女優さんが顎から唾液を零しながらくぷくぷと頭を振り立てている。
幼なじみは赤面したまま大和を見下ろし――。
「大和ちゃんも、女の子にこんなコトしたいって思ってるの？」
とんでもない球を投げ込んできやがった。
「……ふぇえぇっ⁉」
いつもの紗良を真似て驚いてみせる。正直自分でも気持ち悪かった。
「な、なな何を仰いますやらお嬢さん、世の女性に接することガラス細工を扱うが如きあまり緊張しすぎて取り落としその儚さに涙するほどの繊細紳士として定評のある久瀬大和がそげな不埒な欲望を抱くなんてぶっちゃけありえないっすよまったくもうさぁわかった

ならそいつを俺にヨコセぇぇぇぇっ」

動揺のあまりわけのわからない台詞を口走りながら立ち上がり、とりあえずパッケージを取りあげようと野獣の如く紗良に襲いかかる。しかしその時、雑な上げ方をしていたせいで掛かりの悪かったボタンがすっぽ抜け、スラックスが膝までずり落ちてしまう。下着は太ももに引っかかったままで、いきり立った男の印が丸見えになった。

「……ふぇぇぇぇぇっ!?」

今度は本家が驚きの声を上げ、ちっちゃな顔をちっちゃな掌で覆った。なんか思いっきり指を拡げて目が隠れていないようにも見えるが、気のせいだと思いたい。

「や、大和ちゃん。なんだかテレビのと違うよっ？　もやもやしてないよっ？」

「現実世界にモザイクがかかるか！　ってかやっぱりばっちり見てるじゃねーか！」

「だ、だってだって！　そ、それより大和ちゃんこそ！　そそ、そんなにおっきくして！」

慌ててズボンをずり上げようとする最中に痛いところを突かれて動揺し、足をもつれさせて再びベッドに尻餅をついてしまう。叫び返して吹っ切れたのか、相も変わらずギンギンにいきり立つペニスを、紗良はもはや目隠しするふりもやめてむむと睨みつけた。

そして――何故か少年に向かって一歩前へ。

「やっぱり、したいんだ。女の子のこと、いいなりにして、せーどれーにしたいんだ」

「いや、違うぞ紗良、そんなことはないというかなんというか」

「そんなことあるもんっ！　このえっちなビデオがうごかぬしょーこだよっ」

しどろもどろで言い訳する大和に構わず、また紗良が足を運ぶ。
「ダメなんだからねっ。そんなことしたら、おまわりさんに捕まっちゃうんだからねっ」
「だ、だからだな、その……っ」
間近まで寄った紗良が、両の腰に手を当てて精一杯吊り上げた垂れ目で覗き込んでくる。
いつもは無駄にべらべらと回って出任せを紡ぎ出す口は肝心な時にはまるで役に立たず、窮状を脱する気の利いた言葉どころか意味のある単語一つ出てこない。
――大和ちゃんなんて大っ嫌い！
いつその台詞が出てくるかと気が気ではない少年の目の前で、幼なじみの唇が小さく震える。絶体絶命の状況もわきまえずその柔らかそうな質感に目が釘付けになり、陰茎の根元が痛いほど張り詰める。
紗良はそれにも気付かずたじたじの大和を赤い顔で見つめながら――。
「その、でも、だったら、どうしても、我慢できないなら！　わたしが大和ちゃんのしたいことしてあげる！　大和ちゃんのせーどれーになってあげるから他の子は襲っちゃダメなんだからぁ！」
これまでの意味不明な発言集に比べても輪を掛けてわけのわからない事を叫びやがった。
「……っはぁあっ⁉　紗良、マジでお前何言って――」
「えーと、えーっと」
混乱する大和をよそに、紗良は大和のペニスとテレビの中で行われる激しめのペッティ

ングを何度も見比べ、ベッドの端に腰掛けた格好の少年の股ぐらへ、足を揃えて跪く。
その仕草だけでぞくりと後ろ暗いほどの欲情がこみ上げた。紗良はその内心を知ってか知らずか、大きな瞳をまん丸くして、少年のペニスをまじまじと見つめる。視姦された肉棒が逸るようにビクンと脈打つ。紗良がひゃっと可愛らしい悲鳴を上げて驚いた。
「お、おい、よくわからんが、変なことする必要はないんだぞ」
「ううん……わたしがんばるっ！　――えいっ」
わけがわからないなりに無理をしていることは感じ取り、ともあれ幼なじみを止めようとするが、どうやらその言葉が逆に決心を後押ししてしまったらしい。紗良は肩口にかかった髪を背に流すと、少年にとっては見慣れた真っ赤な肉傘へ勢い込んで――。
「っぁああっ！」
ちゅっとキスを降らせた。
ビクンと腰を跳ね上げて情けない声を出した大和に、紗良は慌てて唇を放す。
「！　痛かった⁉　ご、ごめんね、ごめんねっ」
「い、いや、そうじゃないんだが、その」
暴発しそうなぐらい気持ちよかった――なんてもちろん言えるわけもない。あたふたとうろたえる紗良に大和は曖昧な返事をする。
健康な思春期男子である以上当然のたしなみとして、というかさっきまでＡＶを見てオナろうとしてたんだから当たり前の話だが、それなりにそこには自分で触ってきたし、ど

んな感覚がするかも知っているつもりだった。
だが、紗良の唇が触れた瞬間駆け抜けた刺激は、まるで違っていた。快感の量と質が比べものにならない。
女の子に――いや、好きな女の子にされるのはこんなに気持ちいいのかと、怯えにも似た驚きを感じているのに、意地汚いペニスはもっとと催促するようにビクンと脈打つ。
「え、えっと、じゃあ、今度はもっと優しくするね……？」
紗良は困惑しながらも、こちらの表情を上目遣いでちらちらと確認しながら再び股間に顔を寄せた。触れられた亀頭から電撃的なほどの快美がまた弾ける。
柔らかな唇はそのまますりすりと先端を擦り出す。もどかしいだけなはずの小さな刺激が、まるでアンプを通したギターの音みたいに増幅されて、少年に腰を跳ね上げさせる。
「やっぱり……痛い？」
「いや、そんなことは……」
『あー、気持ちいいよ。もっと頭動かして』
たまらず眉根を寄せた大和を見て、紗良は心配げに再び顔を上げた。中断された愛撫にほっとしたような残念なようなよくわからない気分になって、もごもごと口ごもっていると、タイミングがいいのか悪いのか、ＤＶＤの男優が緩んだ声を出した。
「……気持ち、いーの？」
おそるおそる尋ねる紗良から、思わず明後日の方へ目をそらす。

「えへへぇ、じゃあ、もっと気持ちよくしてあげるねっ」
それが充分答えになったようで、幼なじみはとろりとした笑顔を浮かべて一際大胆にぱくりと亀頭を口に含んでみせた。
「……っうぅっ、さ……紗良……っ」
温かい口腔に局部を包まれ、切羽詰まった声を出す。少し潤んだ瞳を、ちらちらと画面に走らせながら、紗良は女優さんの真似っこみたいに肉棒を口内に深く埋めていく。
窄めた唇は亀頭の表面に湿り気を与えながら茎部にまで押し進み、肉棒の中程までたどり着くと巻き付いたまま潮が退くように先端に向けて戻っていった。
背筋をぞわぞわと快感が走り抜ける。身体中に鳥肌が立つ。
一往復、二往復と繰り返すごとに少年の陰茎は幼なじみの唾液に濡れて滑りが良くなり、くぷ、くちゅと水音が響きはじめた。ガチガチにそそり立つ雄肉がさらに感度を増してビリビリと痺れる。桜色の唇に収まっては露出する赤黒いシャフトがぬらりとてかる様は、眩暈がするほど卑猥だった。
絶賛上映中のピンク映像はギリギリなぐらいモザイクの目が細かく、女優さんの口の動かし方や舌使いに至るまでかなり克明に見て取れる。普段なら小躍りするほどありがたいのだが、今は紗良に格好の教材となることで大和を悩ませる。
「んくっ……んっ……ちゅ、んぶ……んぐ……」
なんだこれ。なんで紗良が俺のちんちんしゃぶってんの？　あまりにも突飛な展開に頭

がついていかない。もはや止めるタイミングも逸して、大和はただ暴力的なぐらいの快感を受け止める。

天然でポンコツですぐ騙される幼なじみは裏を返すと素直な性格をしているわけで、そのおかげで意外なほど飲み込みが早い。フェラチオ奉仕にもその学習能力の高さを無駄に発揮して、少年がまごつく間にどんどんイケナイスキルをラーニングしていく。

唇を肉肌に吸い付けながら扱きたて、顔を傾けては頬の内側で雁首を磨き上げる。

『ほら、もっと舌使って。先っぽ舐めて』

まるで紗良にも促すような声がテレビから届き、ねっとりと熱い舌が亀頭にくちゅくちゅと巻き付いてくる。ビリビリと痺れるような快感が走って、たまらずぐっと腰が引ける。

「んっ……ちゅ……っふ、やまとひゃん、きもひいい？」

そして悩乱のタネは愛撫の愉悦ばかりではない。紗良が陰茎を口に含んだままじぃっと見上げて尋ねてくる。不安半分期待半分といった様子で子犬のように瞳を揺らすいじらしい様子に突っぱねることもできず、大和はこくんと頷いてしまう。

嬉しげにえくぼを作った幼なじみは、口奉仕のペースを上げる。くっぷ、くっぷと水音が高く鳴るほど小さな頭を振り立てる。

（気持ちいいなんてもんじゃねぇよ……このバカ……っ）

胸の内で毒づきながら、幼馴染みを睨め付ける。そうでもしていないとあまりにも鮮烈な快楽に頭がどうにかなりそうだった。

「も、もう逃げちゃ……だ、ダメなんだからぁ……っ」
だから、はぁはぁ息を切らして幼なじみが追いついてきた時に思ったことは、「やっぱりな」の一言だった。
肩で息をしてへたり込みそうになりながら、紗良がじっと見つめてくる。その瞳の揺れ方に、これ以上は泣くなと直感的に悟った。
呼吸を整える間も動く気配のない大和を降参したのだと捉えたらしく、落ち着いた紗良はむふんと得意げに見下ろしてくる。
「どうして逃げるの、大和ちゃんっ」
そして、人差し指を立てて突きつけ、母親が幼児を叱るみたいにして迫ってきた。
お前のことが好きすぎて、わけがわからなくなった――なんて台詞が言えるタチならそもそもこんな追いかけっこはやっていない。
「やっぱり……エッチなことしたくて、我慢できなくなって女の子を襲おうとしてたんでしょっ？　そーはさせないんだからねっ」
また一歩紗良が身を寄せる。どうやら意味不明な勘違いは継続中のようであった。
「お、おい、落ち着けって……」
「わたし落ち着いてるもんっ、落ち着いてないのはやまとちゃんだよっ。知らない子にエッチないたずらするなんて、いけないことなんだよっ」
しどろもどろで言い訳するが、興奮した紗良はまるで聞き入れない。目をそらした先へ

子供の頃からの変化率が極端に低い童顔を差し向ける。
（ち……近ぇってのこのぽんこつ！）
黒目がちの大きな瞳に自分の姿が映るほど間近に寄られ、大和は真っ赤になった顔を勢いよく背けた。だが右を向けば右へ、左を向けば左へと、紗良は執拗に追いかけてくる。
「うううー……やっぱりぃ……」
大和はただ照れているだけなのだが、幼なじみはそれを後ろめたいからだと勘違いしたようだった。迫力に欠ける垂れ目を精一杯に吊り上げ睨みつけてくる。
怖くないどころか逆に可愛い。そしてその可愛さが、恋心を自覚した今の大和には一周回って超怖い。バクバクと心臓を鳴らして無意味に叫び声を上げそうな口を噛んで閉じ、もはや目をそらすこともできなくなって幼なじみの美少女顔を見つめ返す。
すると――。
「おっぱい……なんだよね」
紗良はほんのりと頬を赤らめ、ごまかすように小さく唇を尖らせて、脈絡なしに男心をくすぐるワードを持ち出してきた。
「……は？」
「だ、だってだって！　あの時もおっぱいに触りたくて嘘ついたじゃない！」
もうやめて僕死んじゃう！
なかったことにしたい記憶を思い切り蒸し返されて大和は悶絶しそうになった。

「わたし知ってるんだよ。男の子はみんな、おっぱいに興味津々なんだって。あの時、触るだけで見せてあげなかったから、大和ちゃんは満足してないんだよね」
紗良は悲壮な決意を込めた表情で面白おかしい推理を語ると、緊張に震える指をコートのトグルに引っかけた。
「お……おい……」
戸惑っている間に厚いダッフルを脱ぎ去る。ご丁寧に畳んで床に置き、ジャケットのボタンまで開いてしまう。続けてブラウスの前合わせにまで指をかける。
「な、ななななにやってんだお前！」
慌てて叫ぶと幼なじみは恥ずかしげに口元をもにょもにょさせてうつむくが、突然始めたストリップを止めようとはしない。
プチン――プチン――と。
細い指が首元からボタンを外していく。そもそもが目一杯張りつめていた服地は、弾けるように左右に分かれる。真っ白で、滑らかで、むっちりと柔らかそうな肌の露出する面積が、階乗的に拡がっていく。
というか実際死ぬほど柔らかかったその感触をすでに大和は知ってるわけで、深い影を作る谷間が見えた時点で色々もうダメだった。
（いやいやいや紗良先生ここ外ですから！　誰かに見られたらどうするんだよ！）
もはやツッコミは声にならずにただぱくぱくとマヌケに口を閉じては開く。性懲りもな

く下腹に血が集っていくのを情けなく思いながら、魅惑の光景を血走った目でただ眺める。

三つめが外れたところで、レースに彩られたブラが見えた。イメージぴったりの可愛らしいデザインに、『女の子』を強く実感してしまい、かぁっと胸が熱くなる。

みぞおちまでボタンが開いた。紗良はためらいがちに指先で合わせ目をいっそうはだける。学校指定服の中で窮屈に押さえつけられていたたわわな果実が躍り出る。

そのままブラの中央に指がかかった。捻るようにしてホックが外されると、柔らかな大質量はたゆんと重力に引かれて位置を下げた。慌てたようにそれを両手で覆い、紗良はじっと大和を見つめてきた。

「え、えと……変じゃないかな……？」

「え……？　は？　ど、どこが？」

恥ずかしげにもじもじとしながら訊く紗良に、思わず挙動不審になって尋ね返す。

それはもちろんＡＶや雑誌なんかでそれなりに見たことはあるというか、大和は鼻の下を伸ばしながら悪友共と品評会をやってた口だが、それらと比べても遜色ないというかもっと言うなら見てきた中で一番綺麗だ。

染み一つない雪原のような肌に肩幅からはみ出しそうなほどのたっぷりの量感。小さな掌から零れた柔肌がむっちりと潰れているのが扇情的だ。それともそんな男の目線とは別の意味で、女の子にだけ気になる何かがあるのだろうか？

何を心配しているのかまるで見当が付かない大和は、妙な焦りを覚えながら言葉の意味

を探してじっと幼なじみの胸を眺める。だが、どれだけ観察してみても、それは美しく、愛らしく、魅力的なだけだった。

「う、ううんっなんでもないのっ！　その……手……はずすね」

なぜか少しホッとした様子で、幼なじみはゆっくりと支えを外す。

たったそれだけで崩れそうなほど揺れるのに、乳果の全貌は不思議なほどに美しい真円だった。その頂点に乗った桜色のつぼみがギャップでちんまりと小さく見えた。

（これが……紗良の……）

露わになった母性の証を言葉もなく見詰める。

この奇妙な関係の発端となったあの時、触りたくて我慢できずにやっぱり嘘だとばらせなかった。夢中になって揉みしだいた。

思い出せば後ろめたさがちくちくと苛（さいな）んでくるのに、同時に蕩けるような感触が掌に甦って、分身がガチガチに猛ってしまう。

「わ、わわ。すっごく大きくなって痛そうだよぉ」

紗良も目敏くそれに気付き、心配そうに股間を見下ろした。

本人にその気はないのだろうが、紗良はゆっさゆっさと乳房を揺らして大和の目の前まで歩み寄る。だいぶ走らせてしまったせいか、幼なじみからは甘い汗の匂いがした。

紗良は昨日と同じようにして跪き、少年のベルトに細い手を伸ばす。ぶきっちょに留め金を外してジッパーを下げる。

「ちょ……紗良……？」
「大丈夫だよっ、昨日のでもう慣れたんだから。痛くしないからしんぱいしないで……？」
どぎまぎとする大和を見当違いになだめると、紗良は下着まですると下ろしてしまう。たわんだペニスが頬を叩かんばかりに跳ねて、幼なじみはきゃっと小さく悲鳴を漏らした。
早速暴れ回る少年の欲望に怯んだ様子を見せたのもつかの間、紗良はごくりと喉を鳴らして生唾を飲み込み、両脇から豊かな乳房を持ち上げる。
「えいっ」
そして、可愛らしい気合いを発して――。
たゆん、と。
大和ちゃんの大和ちゃんを挟み込んだ。
（う……ぉおおなんじゃこりゃぁあ!!）
大和は思わず心の中で歓喜の雄叫びを上げた。
しっとりと吸い付く肌の奥で、芯を感じさせない柔らかさがさざ波のようにたゆたい、極上のヴァイブレーションを肉棒に伝える。見事に育ちきった幼なじみの胸は蕩けるような心地よさで興奮しきりの肉棒を優しく慰めてくる。
刺激としては決して強くはない。しかしながらその感覚は、彼女の胸以外で同じ快感は決して得られないと断言できるような独特の悦びだった。
「ど、どうかな？　気持ちいい？」

そして、ただでさえ未知の性感に翻弄される少年へ、紗良は子犬が縋るような上目遣いを向ける。心臓に来るほど愛らしい表情に胸がときめき、返事よりも早く陰茎がビクビクと跳ねて肯定を伝えた。

「あは♡　すっごく元気。なんだか、可愛くなってきたかも。たくさんいい子いい子してあげるね……♡」

悪戯坊主に蕩けるような笑顔を見せて、紗良は宣言通り「いい子いい子」とわざわざ口にしながら、むにゅむにゅと両手を動かしはじめた。

「っぅぁあっ、さ、紗良っ……！」

あまりの気持ちよさに情けない声が漏れてしまう。どこもかしこも柔らかそうな幼なじみの身体の中でも、とりわけ柔らかいであろう女の子のシンボルで奉仕される悦びに、肉棒は早くも射精寸前なぐらい敏感になっていた。

紗良はいっそう微笑みを深めて、愛しげに丹念にマッサージを施す。たぷたぷと手を震わせて振動を伝え、ぎゅむぎゅむと柔肉を内へ寄せて根元にまで刺激を送り込んでくる。たっぷりの乳房に全長を包み込まれて絶え間なく隙間なく愛撫される。

露出した肌がひんやりとするのに、ふれあった部分だけが温かい。汗ばんだ豊球は滑ることなくペニスを抱き留めて撫で擦り、さざ波のように乳圧が押しては引いて、うっとりとするような感触が理性をガリガリと削り取っていく。

誰が来るかもわからない屋外で互いの秘部をさらけだし、きわどい戯れに耽(ふけ)るシチュエ

ーションへの不安も、戸惑うほど急速に薄れていく。
「紗良……もういいって、そんな格好、寒いだろ……？」
「んっ……ふっ……そんなことないよ。だってね。大和ちゃんとくっついてるし、それに、こうしてるとなんだか胸がどきどきして、お腹の奥があったかくなっちゃうの……♡」
不埒な男の妄想をまるでそのまま具現化したような、都合の良すぎる状況に腰が引けて、大和は紗良を窘める。だが、幼なじみはたまらなくいじらしい返事をして、太ももまで柔らかさと温かさに包まれるほど乳房を押しつけてくる。
まるで言葉を証明するように、ふっくらとした頬は薔薇色に染まっていた。喉の奥からは愛らしくも色っぽい吐息が零れ、くすぐるように茂みを揺らす。更に視線を落としていくと、突き出した腰がふりふりと可愛らしく揺れていた。
「それにね……あの時の大和ちゃんと比べたら、こんなの全然平気だよ……？」
そして――幼なじみはだめ押しのようにぽつりと呟きはにかんでみせた。
脈絡のない台詞でも、幼なじみの大和には『あの時』がいつのことかすぐにわかった。場違いな嬉しさがこみ上げて、思わず頭に手を乗せる。
親指で、ハート型の髪飾りをなぞる。子供っぽいデザインのアクセサリは塗装がはげかけていて、少しざらついた感触がした。
「うん……♡」
それで正解だというように、紗良が頷く。幸せそうにまつげを伏せてお得意のえへへ笑

いを零し、また一段と張り切って肉棒を捏ねだした。
同期させてたぷたぷと上下させていた双球を、今度は右左でずらしてむにゅりむにゅりと押したわめる。根元をやわやわと捻り込まれて暴発しそうなほど睾丸がきゅうと疼き、少年はたまらず腰を引き攣らせる。
眼下では芯になったペニスを軸に、育ちすぎなほど豊かな乳房が非対称に伸びて縮んで形を変える。幼なじみは少しでも強く雄肉に刺激を与えようとするかのように両手に力を込める。マシュマロのように柔軟な胸肌を、みっちりと食い込んだ指がたわませる。
心を奪う光景に目は釘付けになり堪えようがないほど鼻息が荒くなる。射精欲求は加速度的に高まっていく。
「んっ……っふぁ……ぁあん♡　大和ちゃんわたし変だよぉ……大和ちゃんのこと気持ちよくしてあげようとすると、なんだか、わたしまでぇ……っ♡」
しかも、奉仕を施す側の紗良も、ペニスで乳肌を嬲られる感触に昂ってしまうらしい。吐息混じりに名を呼んで、涙の被膜に潤んだ瞳できゅうと見上げてくる。
ふりふりと可憐に揺れていたお尻はいつの間にかねっとりと重たげにくねっていて、その艶めかしい腰つきに劣情はいや増した。
（くそう……何なんだよ何なんだよ何なんだよもう！　こんなの――可愛すぎんだろ！）
ごまかすように大和は細く柔らかい髪を梳る。すると、紗良は何故か驚いたように身を震わせ、「んっ♡」と色っぽい声を漏らした。操られるようにさわさわと頭を撫でると、「ふ

ぁっ♡　あんっ♡」と鼻血が出そうになるほど可愛らしく喘ぎヒクつく。
その反応をごまかすように、紗良はとろとろの乳房を押しつけてくる。脚の付け根を何か硬く痼った感触が撫で、幼なじみは「ひぁあん♡」と一際はしたない嬌声を上げた。かぁっと恥ずかしげに赤面しながら慌てて持ち上げた乳房の先端で、桜色の乳首がぷっくりと膨らんでいた。
こんなの反則だ。好きで好きでたまらない奴のこんな悩殺的な姿を見せられて、理性なんか持つわけがない。勘違いを解いてやめさせなくてはなんていう当然の倫理が、強烈な欲望に押し流される。
気付けば大和は細かく腰を繰り出していて、自らふくよかな乳房の与えてくれる刺激を意地汚く貪りはじめていた。
染み出した汗が潤滑剤となって表面が僅かに滑り、甘い愉悦が肉幹に弾ける。紗良の爆乳はペニスをすっぽりと包み込んでなお余裕があるらしく、亀頭はいつまでも胸板に当たることなくふにふにと優しく受け止められる。やがてそちらも先走りにぬるぬるとぬめりだし、びりびりと痺れるような淫楽が生まれる。
「紗良……俺、もう……！」
「いいよ、いっぱい気持ちよくなって、大和ちゃん……♡」
せっぱ詰まった声を出す大和に、慈しむような笑顔を向けて、紗良はいっそう激しく乳房を揺さぶりだした。

「す、すまんっ……じゃあ、痛かったら言えよ？」
大和はどんな体勢になればいいか少し迷って、自身の両足を柔尻の左右に送り込んで腰の位置を合わせた。
逸る息子を引き倒し恋人の秘部へと突きつける。粘膜に先端が触れた瞬間、紗良は「ふぁっ♡」と色っぽい声を漏らしてビクンと跳ねた。
ぐずぐずしていると何もしないうちに無駄撃ちしそうだ。覚悟を決めて入り口を探す。迎え入れるように開いた陰唇の内側をなぞると、唇の下端に落ちくぼんだ感触があった。
ここか？　――と口にする代わりに幼なじみを見つめる。すると紗良はぎこちなく微笑んでみせた。
頷き返して腰を送る。
「あぅ……っ」
亀頭にぐっと圧力が掛かり、同時に紗良が眉間をしかめた。鈍る決心を再び恋人の浮かべた笑顔が後押しして、大和は奥歯を噛んでまた陰茎を繰り出す。
目一杯空気を入れたゴムボールみたいに弾力に満ちた感触が、ミチミチと軋んで裂けるように拡がっていく。先端がくぷりと嵌まり込んで、ぞわりと快美が背を走る。大和は苦しげにさまよいだした幼なじみの手を取り、指を絡めてぎゅっと握る。
「大和ちゃん……来て……っ」
すると力みが僅かに緩んで、ぬるりとシャフトが押し進められる。

「っ……んぅうううぅうううっ」
ゴムの向こうで薄い弁がぷちんと弾けた。幼なじみがくぐもった呻き声を上げる。硬く、だがぬかるんだ膣道が肉幹を飲み込んでいく。乱暴に突き入れたくなるような魔性の愉悦に抗って、大和は純潔の道をゆっくりとゆっくりと寛げていく。
やがて鈴口がコツンと彼女の最奥に行き当たり――。
「っぅううンっ……えへへ……繋がっちゃったね」
ついに、想いを遂げることができた。
「……っ……痛くねぇか？」
「……うん、平気だよ」
ぎちぎちと押し潰すような締め付けに大和はたまらず歯を食いしばった。初めて体験する幼なじみの体内は、大和の貧弱なボキャブラリーでは釣り合う例えがとても見つかりそうにないほど心地いい。間断なくこみ上げる強烈な射精欲にやせ我慢で抗い、眉間をしかめながら訊くと、紗良は掠れた声で強がってみせる。どうやら相当辛いみたいだ。
「大和ちゃんこそ、痛くない？　辛そうな顔だよ？　平気？」
だというのに幼なじみは心配げに頬へ手を伸ばしてきた。またもやのきゅんとくる仕草が勃起中枢をダイレクトに撃ち抜き、膣内で雄肉がびくんと跳ね上がった。
っていうかそもそも――ちょっとの刺激でも出してしまいそうでこっちも動くに動けん。
喪失の痛みに処女地は強張り、加減知らずにペニスを締め付けてくる。そして結合部に

与えられる過剰な刺激もさることながら、さっきから幼なじみはやることなすこといちいち可愛くて余計に我慢を難しくしてきやがる。生でしてたら即死だったんじゃなかろうか。しゃにむに腰を振りたくりたい衝動と、健気な恋人への気遣いと、そして早漏の誹(そし)りは免れたい男のプライドが混じり合ってせめぎ合う。

「慣れるまで、このまんまな？」

「うん……ごめんね」

ごまかすように髪を撫でると紗良は少しホッとしたように謝った。

とにかく、このきつすぎる締め付けを何とかしないとセーブが利きそうにない。興奮と昂揚で熱暴走気味の脳みそをぐるぐる回しながら、何とか間を持たそうと幼なじみの髪をさわさわと梳る。

すると紗良は「んっ♡」と甘い吐息を零して、きゅうっと膣内を締め付けた。収まった時の肉圧は、さっきよりも少しマイルドになっているような気がした。

これだ――と大和は思い立ち、腰を突く代わりに顔を寄せてキスを降らせる。

ちゅくとついばむとまた膣襞がぎちりと絡みつく。顔を上げて親指で頬をなぞると夢見がちに瞳を細める。また少しこわばりが取れた。

とにかくこのまま紗良が落ち着くまで続けてみよう。その間にこの快感にも慣れるだろうという打算も込みで、再び唇を重ねる。

「んっ……っふぁ……っ……ぅうン……優しいの、嬉しいよぉ……♡」

舌を差し込みくちゅりと水音を立てて口内を掻き乱し、乳房に手を乗せてやわやわと揉み込む。素直な笑顔を見せられるとまた気持ちが昂って、いっそう愛撫に熱がこもる。

唇を頬に寄せ、耳に移し、首筋を食んで痕が付くほど鎖骨を吸う。その間もたっぷりとした巨乳を回し、たわめ、寄せては持ち上げ、極上の柔らかさを堪能する。

「あぅん……んっ……っふぁあっ……ぁン♡　大和ちゃん……やまとちゃぁん……♡」

愛撫を続けていくうちに、幼なじみの表情と反応は予想以上のペースで蕩けていった。

柔乳を捏ねる掌へヒクン、ヒクンと甘やかな痙攣が直に伝わる。しかめられていた眉根がふわりとほどけ、耳元で名を呼ぶ声は切なげに上擦る。

いつしか大和は当初の目的も忘れて、恋人への淫らなマッサージに没頭していた。

「ふぁ……っはぁあン♡　はっ……ひっ、ひぅんっ♡」

朱の浮いた乳肌を強めにごねごねと握り込み、浮かせた人差し指で乳頭を弾く。硬く痼ったつぼみを震わされるたび、紗良はビクリビクリとすべらかなお腹まで波打たせる。

魅了するようなその動きに誘われるまま、ぺこりとくぼんだおへそに片手をかぶせた。

「はわぁあぁ……や、やぁ、そんなとこ恥ずかしいよぉ……っぁああン♡」

すると紗良は可愛らしくいやいやをしながら、何度もきゅんきゅんと下腹をへこませた。その反応に連動して膣襞までぐにゅりぐにゅりとシャフトに絡みつき、今度は大和が肉悦に呻く。

さっきまでは握り潰す気かってなぐらいギリギリと喰いついていた膣内の動きが、今は

甘えて縋るようなものへと変わっている。これはこれで腰裏がぞわぞわするほど気持ちいいが、まだ射精欲求をコントロールできそうだ。

そろそろ動いてみてもいいだろうか。だがしかし少年が覚悟を決めたその矢先――。

「あうぅ……んんっ♡　やまとちゃんまってぇ♡　そのね、えと、そ、そだっ、や、やっぱり痛い……かも？」

恋人はまた妙なことを宣いだした。

待てや今確かに『そうだ』っつったよな？　大和はじっと半眼で恋人をすがめ見る。何故目をそらしますかお前様は。

騙されやすいの裏返しとして紗良先生嘘がド下手くそである。つまり、今の状態は痛いの正反対なわけで――。

（ああまったくなんでこいつは――！）

人が必死で自重してる時にそういう可愛い真似をしますかねぇ⁉

もう遠慮なんかしてやるものかと大和はお腹に置いた手を下へずらす。さわりと茂みをくすぐって、可憐なピンクの真珠を親指でくりゅんとなぞる。

「ふぁああぁぁああっ♡」

すると紗良はビクビクっと腰を震わせて甲高い嬌声を上げた。

「そうか痛いかー。だったらもっと馴らしてやらないとなっ」

「ひっ♡　あひっ♡　ち、違うのっ♡　そぉじゃないのぉっ♡」

「違う？　なにが違うのかわかんないですね？」
ぷっくりと膨れたつぼみを練り潰すと、紗良はぶんぶんと首を振ってよがる。肉棒を絞め立てられ脂汗を浮かべながらも、意地悪くすっとぼけながら責め続ける。
「あっ、ぁああン♡　ごめんなさいっ♡　うそっだよぉ♡　痛いのうそだからもぉそれやめてよぉ～っ♡」
「う、そ、ですとぉ～？　そんな悪い子にはお仕置きが必要ですなぁフッヒヒィ！」
秒殺で音を上げたチョロ可愛さに我ながらキモイ台詞を口走ってしまうが、紗良はお仕置きというフレーズを持ち出した瞬間何故かきゅうんと肉襞を締め付けた。
もはや辛抱ができずに、ずろりと腰を引いて結合を浅くする。露出したシャフトに絡みつく体液は限りなく薄いピンク色で、湧きだした愛液の多さをありありと物語る。
雁首で膣前庭をくちくち捏ねても恋人は悩ましげに下腹をヒクつかせるだけ。最終確認を完了すると、大和はぐっと歯を食いしばってずぶりと勢いよく突き込んだ。
「あぅううぅうンっ♡」
予想通り幼なじみは頤をそらして悶えはしても、痛がる様子は見せなかった。
大和は完全に吹っ切れて腰を揺すりだす。大胆な抽送に接触面がぐちゅりとずれて、ねち、ぶぢゅと重たい水音が鳴る。丁寧に馴らした媚肉はねっとりとこなれて襞の一枚一枚がまとわりついてくるようで、肉棒全体に強烈な痺れが走った。
「うふぅうぁぁああン♡　ごめんなさいっ♡　らって大和ちゃんに触ってもらうと、ズ

キズキがじんじんになっちゃうのぉ♡　気持ちよくなっちゃうからダメなのぉ♡」
紗良は発育の良い肢体を盛大にビクつかせ、ひんひんとはしたなく喘ぎまくった。
泣き出しそうなほど恥じらうその表情も、口走った台詞のいじらしさも、可愛くて可愛くてたまらない。まるで操られるように抉り込みにいっそう容赦がなくなる。
膣道の奥までとんとんと突き上げ、腰を突き出したままぐりゅぐりゅと回し、純潔の庭を好き放題に耕していく。膣襞を押し伸ばされ掻き削られるごとに紗良の喘ぎ声は高く大きくなり、エコーがかかってバスルームに響きわたる。
「いいじゃねぇか気持ちよくなっちまえばっ」
「あぅンらめらめ恥ずかしいよぉっ♡　こんな恥ずかしい子やまとちゃんにきらわれちゃうよぉ……っ」
そう言ってきゅっと手首を握ってくる紗良にもしかしたらコイツはわざとやってるんじゃないだろうかとかあり得ないことを考えてしまう。
あざといほどの愛くるしさに興奮は極まり、大和は乱暴にお尻を抱き寄せのし掛かるようにして肌を合わせた。
「バッカじゃねぇのお前、こんな可愛いのになんで嫌いになるんだよ……っ」
照れ隠しでぶっきらぼうに叫んで乱暴に唇を奪う。柔らかな肢体が腕の中で切なげにビクビクと打ち震えた。
「ほんとっ？　ほんとに……っ？」

背中に細い腕を絡め、潤んだ瞳できゅうと見上げて紗良が訊く。返事の代わりにまたキスをして、ぐにぐにと腰を使って膣奥を寛げる。

「ふぁああっ♡　あぁひっ、ひもち……いいよぉっ♡　やまとちゃんにだっこされるのすっごくすっごくきもちいいよぉっ♡　初めてなのにきもちよくってえっちな声がたくさんでちゃうのぉっ♡」

するとようやく幼なじみは、吹っ切れたように蕩けた声で喘ぎだした。

「ふぁあぁ……ぁああぅンっ♡　やまとちゃん、好きっ♡　だいすきぃっ♡　あはっ…ぁあン♡　もっとぉ♡　もっとちゅーするのぉ♡」

抱きつく腕に力を込めて柔乳をすりつけ、律動に任せて震わせるだけだった腰を明らかな意志をもってくねらせる。頬は真っ赤に染めたまま、とろりと目尻を下げて微笑み自ら唇を重ねてくる。瑞々(みずみず)しい花弁でむちゅ、くちゅと吸い付きながら、「しゅき♡　しゅきぃ♡」なんて愛の言葉を口内へ直接吹き込んでくる。

（っくぁああもう！　可愛すぎだろ！）

破滅的なほど愛らしい媚態にもう理性など跡形もなく吹き飛んでしまい、大和はしゃにむに腰を振り立てた。ぱちゅんぱちゅんと音が鳴るほど激しく腰を打ち合わせ、とろとろにほぐれた蜜園を単調なほどしつこく掻き崩す。

「あっ…ぁあああっ♡　もぉらめっ♡　またきちゃうっ♡　さっきのふわってするの、またきちゃうよぉぉおおっ♡」

瞳の縁から涙を零し、口の端から涎を垂らし、可憐な顔を淫靡に蕩めかせて幼なじみが切羽詰まった声音で訴える。少年もあまりの快感の強さに息を荒らげて額に脂汗を浮かべながら、かすみそうな目で恋人を見つめた。

「イキそうなのか……？　俺ももう……いっしょに……！」

「イ……ク……？　うんっイクのぉっ♡　やまとちゃんといっしょにとんでっちゃうのぉっ♡」

ぐにゅり、にぢゅりとペニスに巻き付く秘裂から絶えず送り込まれる快感に、いい加減我慢も限界だった。大和の言葉をいったいどんな風に解釈したのか、紗良はむっちりとした美脚まで腰の裏に絡めると、ぎゅうっと全身で縋りついてくる。

「っぁあああ！　紗良……っ！　紗良ぁ！」

それが最後の一押しになった。大和もまた幼なじみの肢体をきつく抱きしめて、腰を押し込み子宮口へ亀頭を密着させる。そして噴き上がる衝動のままに――。

びゅる、びゅく、どぷ！　――と。

溜めに溜め込んだ欲望の塊を吐き出した。

「ふぁあやまとちゃんっ♡　やまとちゃぁんっ！♡　ぁあっぁはぁああ～～っ！♡」

同時に紗良も艶めかしい絶叫を放ち、ビクビクと一際激しい痙攣を見せた。

ゴムも破れろとばかりにドクンドクンと大量の白濁を撃ち出し暴れ回る肉棒を、ねっとりとぬかるんだ性の粘膜がきゅうんきゅうんと狭まってなおさらに搾り立てる。結合部の

僅かに上の小穴からじょわりとまた愛液が吹き零れて大和の茂みを熱く濡らす。
ぎゅっときつく目をつぶって全身をちぢこめてぶるぶると震え、紗良は離れまいとするかのように絡めた手足に力を込める。火照った柔肌の吸い付く感触にいつまでも吐精は収まらず、大和もまた細い身体を折れそうなほどに抱きしめる。
何もかもが満たされた気分だった。これ以上の幸せなんて、存在しないんじゃないかとさえ思えた。
腕の中に収まった幼なじみが少しずつ絶頂の強張りをほどいていく。恍惚と震える仕草が愛しくて愛しくて仕方ない。やがて紗良は瞳の焦点を取り戻すと、荒い吐息を漏らしながら恥ずかしげに口元をもにょもにょさせた。
「あう、あの……ご、ごめ……っんぅ♡」
おおかた潮吹きのことなんだろうがまた謝ろうとする幼なじみをキスで黙らせる。顔を上げて指先でおでこをつついてやると、ようやくはにかみ笑顔を見せた。
「えへへ……やまとちゃん、だぁいすき♡」
紗良はうっとりと瞳を細めてきゅっと抱きつき、甘えるように胸板にすりすりと頬を寄せる。キュートな仕草に可愛いなぁもう！　と胸の内で叫びながら抱きしめ返す。
結局二人で空の湯船の中くっつき続け――ようやくバスルームを出たのは幼なじみがまたくしゃみをして湯を張りなおし、更に一時間近く経ってからのことだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!